

## 岡崎嘉平太と中国

服部 龍二

はじめに

本日は、お招きにあずかりまして、誠にありがとうございます。岡崎嘉平太記念館の関係各位をはじめ、お集まり下さった方々に心より御礼を申し上げます。

私は父親が岡山県笠岡市の出身でして、こちらの岡崎嘉平太記念館にも来たことがございます。本日は、大阪総領事でいらした劉智剛先生とともに、皆さんにお話しできることを、心から光栄に思っております。

講演のご依頼があったとき、はなはだ僭越ながら、岡崎先生と中国というテーマでお話できればと考えました。以前にも同じようなテーマで講演があったものと存じますし、また、私は岡崎先生について、いままで十分に研究してきたわけではございません。

ご遺族、ご親族の方々をはじめ関係者が大勢いらつしやるなかで、岡崎先生についてお話しするというのは、釈迦に説法を地でいくようなものであります。それでも、この講演を契機にぜひ勉強してみたいと感じました。

そのとき念頭にあったのは、最近、公開された史料を用いれば、少しは皆さんのお役に立つところがあるかもしれないということでした。といいますのも、外務省外交史料館におきまして、二〇一一年二月、日中国交正常化に関するファイル一五冊が初めて本格的に公開されました<sup>①</sup>。そのなかに岡崎先生の肉声を伝えるような文書が含まれていました。そのいくつかをご紹介することぐらいはできるかもしれない、と思えたわけです。

### 岡崎のプロフィール

まず、多くの方には必要ないかもしれませんが、岡崎先生のプロフィールを簡単にお話ししたいと思います。

岡崎先生は一八九七年、岡山県吉備郡に生まれました。岡山中学、第一高等学校を経て、一九二二年に東京帝大を卒業し、日本銀行に入行されます。日中戦争期には中支那派遣軍特務部付となり、一九三九年には上海の華興商業銀行で理事に就任します。太平洋戦争中の一九四二年には大東亜省参事官となり、翌一九四三年には在中国日本大使館参事官として上海に勤務します。

戦後には公職追放を受けますが、一九四九年には池貝鉄鋼の社長に就かれ、丸善石油や全日空の社長を歴任します。一九六二年には高崎達之助衆議院議員らと訪中し、日中間の貿易に尽力します。一九六四年には高崎さんの死去に伴い、日中総合貿易連絡協議会会長となります。日中国交正常化後の一九七二年一月には日中経済協会を設立し、常任顧問になりました。その後も中国を繰り返し訪問され、一九八九年に亡くなっています。

### 戦前の岡崎

それでは岡崎先生は、中国とどのようにかかわったのでしょうか。戦前にさかのぼって、お話しいたします。

岡崎先生には岡山中学校のとときに、陳範九さんという中国人の学友がいて、中国への関心が芽生えました。第一高等学校のとときには、龔徳柏さんという友人がいましたが、対華二十一カ条要求が行われていたような時代でしたので、「日本という国は実にけしからん国だ。こんな国にはいたくないから中国に帰る」と言って帰国してしまいました。岡崎先生は学生のときから、「アジアでは日本と中国が——実は私はインドを含めて考えていたのですが——手を握ってまずアジアの文化を高め、アジアの貧乏を追放しなければいけない、アジアの中でお互いに争っていたら植民地の状態から永久に脱却できない、と思ってきました」とのことです。

岡崎先生は一九二二年に東京帝大を卒業し、日本銀行に入ります。ドイツ駐在、外国為替局長などを経て、一九三八年三月、陸軍省嘱託として上海に赴き、為替金融を調査されます。一九三九年に華興商業銀行という日中合弁の銀行が上海に創設されると、岡崎先生は日銀

を退職して上海華興商業銀行の理事となります。

一九四二年には帰国して大東亜省の参事官になりますが、一九四三年には上海の日本大使館参事官として赴任します。

上海で終戦を迎えた岡崎先生は、日系工場における退職金問題に奔走します。日本の敗戦が決まると、日本企業の工場で働いていた中国人労働者が、それぞれの会社に退職金を要求したのです。岡崎先生は、国民政府とも連絡をとりながら対処し、一九四六年に帰国します。

池貝鉄鋼や丸善石油、日本ヘリコプター株式会社、つまり、のちの全日空で社長として経営に携わられ、貯蓄増強中央委員会の会長にもなりました。貯蓄増強中央委員会とは、通貨安定やインフレ抑制を目的とした日銀、大蔵省の救国貯蓄運動に呼応した民間の国民運動でした。

### L T貿易と政治三原則

岡崎先生が再び中国と交わるようになるのは、いわゆるL T貿易においてでした。L T貿易というのは一九六二年から始まった半官半民の日中貿易のことで、正式には日中総合貿易に関する覚書といえます。Lは中国側代表の廖承志さん、Tは日本側代表の高崎達之助さんから採ったものです。

一九六八年には日中覚書貿易に改められまして、一九七四年に日中貿易協定が締結されるまで続くこととなります。

L T貿易を進めたのが、自民党衆議院議員の高崎さん、松村謙三さん、そして岡崎先生でした。その背景には、中国との交易を進めようとする池田勇人首相の後押しがありました。

高崎さんは、戦時中に満州重工業総裁などを歴任されまして、一九

五五年には鳩山一郎内閣の経済審議庁長官としてインドネシアのバン  
ドン会議に出席し、周恩来総理と会談しています。<sup>3)</sup> 日中の閣僚級会談  
としては、最初のものでした。

LT貿易まではどうだったかといえますと、一九五八年にいわゆる  
長崎国旗事件が起りました。中国はそれまでの貿易協定をすべて破  
棄し、日中貿易を停止してしまっただけです。長崎国旗事件とは、日  
中友好協会の長崎支部がデパートで中国の切手や切り絵などの即売会  
を行い、中国国旗を掲げたところ、右翼青年がこれを引き下ろしたと  
いう事件です。

中国は政経不可分ということで、政治三原則を打ち出します。三原  
則とは、中国に対する敵視を止めること、「二つの中国」を作る陰謀  
を行わないこと、中日の正常な関係の回復を妨げないこと、でした。<sup>4)</sup>

#### 周恩来との出会い

全日空社長だった岡崎先生は、高碇議員とともに一九六二年一〇月  
下旬から一月上旬にかけて訪中します。LT貿易に関する交渉のた  
めでした。岡崎先生は、このとき初めて周恩来総理とお目にかかっ  
ています。

周総理は一月一日、国務院で岡崎先生たちにこう述べました。

甲午（日清）戦争<sup>1)</sup> 日本は八十年に渡ってわが国を侵略し、

人命、財産に大きな損害を与えた。ことに東北（満州）事変以来  
はわが国は甚大な損害を受けている。われわれはこれを深い怨み  
に思っている。しかしこの怨みの八十年も、中日友好二千年の歴  
史に比べれば僅かな時間である。われわれはこの怨みを忘れよう

と努力している。怨みを忘れて、これからは手を握ってアジアを  
強くしましょう。アジアを強くしたその力で、外に向かって戦を  
挑むのではない、将来もしアジアの外から再びアジアに圧力をか  
けるものがあつたら、それを防ごうではありませんか。

そう述べた周総理は、「岡崎先生どうですか」と問いました。とっ  
さに岡崎先生は、こう答えました。

日本と中国とは共に手を携えてアジアの独立、文化向上、貧乏  
追放をやるべきだということは私の学生当時から願っていた。

周総理は、第一回貿易協定調印の席に現れ、陳毅外交部長、郭沫若  
科学院院長などを伴って臨席しました。

高碇さんと廖承志さんが署名する間、周総理は岡崎先生の傍らに立  
ち、「岡崎先生いつ帰りますか」と日本語で呼び掛けてきました。<sup>5)</sup>

岡崎先生たちが進めたLT貿易は半官半民の長期パートナー取引協定  
であると同時に、民間事務所相互開設、新聞記者の交換、政財界の  
窓口をもたらすものでした。<sup>6)</sup> LT貿易に結実する交渉は、中国による  
賠償請求の放棄とも関連します。

#### 賠償請求の放棄

ご存じのように、一九七二年の日中国交正常化に際して、中国は賠  
償請求を放棄しています。日中共同声明の第五項に、「中華人民共和  
国政府は、中日両国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の  
請求を放棄することを宣言する」と記されます。

中国が最初に賠償請求の放棄を日本に伝えたのは、その一〇年前の一九六二年に高碕議員、岡崎先生が訪中したときのことでした。中国は一九五五年の段階では、日本が「中国の公私の財産に数百億米ドルにのぼる損害を与え」たとして、賠償請求権を主張していました。

ところが、高碕議員、岡崎先生が一九六二年一〇、一十一月に訪中したとき、中国側は賠償請求放棄の意向を示しています。

貿易協定を締結しようとする高碕議員、岡崎先生らに対して、趙安博<sup>はく</sup>中国共産党中央外事工作部秘書長が一月八日にこう述べています。

中国はたしかに請求権はありますが、中国としてはたとえ、日本と国交を回復する時になつても、そのような請求権の問題を強く表面に出す考えはもつておりません。

何故かと言えば、それは第一次大戦後のドイツの例によつても明らかなく、もしそのような請求権問題を強く表面に出せばそれは日本国内にファシストを誘起させることになりす。

これらのことは外務省の記録に出てまいります。<sup>(7)</sup> 岡崎先生はこのような発言を受けて、中国が賠償を請求しないだろうと感じとりまし<sup>(8)</sup>た。

このとき中国側には、孫平化<sup>そんへいかに</sup>、肖向前<sup>しょうきゆうぜん</sup>、王曉雲<sup>おうきょううん</sup>という「知日実務家の三羽鳥」が同席していました。<sup>(9)</sup>

賠償請求の放棄が内示された背後で、周総理の意向が働いていたことは間違いないでしょう。LT貿易の覚書が交わされたのは、一九六二年一月九日のことでした。<sup>(10)</sup>

## 日中覚書貿易

佐藤内閣期になりますと、日中関係は再び停滞します。それでも、LT貿易は一九六八年に日中覚書貿易に改められ、継続となります。岡崎先生、古井喜実議員、田川誠一議員らの尽力によるものでした。さらに岡崎先生は、対中関係の推進に意欲を示します。それについても、外務省の文書が残っていました。一九七一年に外務省の中国課が作成したその文書には、こう記されています。

日中覚書貿易の岡崎嘉平太代表と、大久保事務局長は、中共側から七月はじめに来てほしいといつてきたが、六月中にも訪中したいと再度申し入れた。訪中の目的は明年度の日中覚書貿易交渉を本年一一月に行いたい旨提案し、また、各種の懸案事項を処理するためである。

これは大久保任晴事務局長が橋本<sup>はしもと</sup>恕<sup>しよ</sup>中国課長に伝えた内容です。このころ中国共産党は覚書貿易事務所を通じて、岡崎先生のほか、川崎秀二を団長とする自民党や公明党の若手議員訪中団を受け入れると通知していました。中国側は、「参議院選挙後の七月はじめに来てほしい」と伝えていました。

それに対して岡崎先生は、「六月中にも訪中したい」と再度申し入れたわけですから、つまり、岡崎先生のほうが、より積極的だったといえると思います。<sup>(11)</sup>

一九七一年七月一五日には、いわゆるニクソン・ショックが日本を襲いました。アメリカのニクソン大統領が、突如として訪中を発表し

たのです。一〇月二五日には国連が中国の加盟を承認し、台湾は国連脱退を表明しました。日中国交正常化の国際環境が整ってきたわけです。

#### 日中国交正常化のあとで

一九七二年七月七日、田中角栄内閣が成立します。田中首相らが訪中し、九月二九日には周恩来と日中共同声明に調印します。

日中国交正常化の直前、岡崎先生は周総理によって招待されています。岡崎先生が九月一二日二〇時、帰宅して電話を取ると、北京からでした。周総理が劉希文対外貿易部副部長に電話させたのです。周総理が劉希文さんに「中日国交回復の日を北京で迎えるよう岡崎先生を招待することを、正式に伝えたいか」と聞いたところ、答えは、「まだ伝えてない」とのことでした。周総理は、「それはいかぬ、今すぐここから岡崎先生の宅に電話せよ、電話料は私が持つ」と述べたのでした。

訪中した岡崎先生は九月二三日、周総理らとごく内輪で食事します。人民大会堂に、一卓だけを用意した小宴でした。その席で周総理が岡崎先生に語りかけました。

わが国には水を飲むときには、井戸を掘った人を忘れない、という言葉がある。中国と日本の国交は間もなく回復するであろうが、そう成るには松村先生、高碕先生、石橋〔湛山——引用者注〕先生、村田〔省藏——引用者注〕先生などが困難に屈せず、大きな努力をされたからである。あなた方も努力しましたね。

岡崎先生には、生涯、忘れられない言葉になりました。<sup>12)</sup>

#### 「中国の勉強をさせるつもりである」

帰国した岡崎先生は一九七二年一〇月、橋本中国課長の往訪を受けています。橋本課長は、のちに駐中大使になる方です。岡崎先生は覚書貿易事務所の役割について、こう語っています。

一、自分としては、日中国交正常化が実現するに伴ない、直ちに日中覚書貿易事務所を閉鎖する考えであったが、中国側から、日中双方の大使館設置までかなり時間がかかりそうであるので、覚書貿易協定及び覚書貿易事務所をもう一ヶ年継続させたい旨強く希望したので、来年一杯、継続させることとした。但し、来年中には必ず閉鎖したい。

二、来年の早い時期にでも北京に日本大使館が開設されることになれば、北京駐在の覚書貿易連絡事務所員から大使館員になる者も生じようが、残りの者はそのまま覚書貿易連絡事務所で中国の勉強をさせるつもりである。

三、在京の日中覚書貿易事務所の職員の再就職の問題については、この一年来、今日を期して準備してきた結果、大体目途がついており、外務省側に迷惑をかけるつもりはない。万一、外務省の御協力が必要とする場合にはよろしくお願いする。

北京に日本大使館が開設され、覚書貿易事務所はやがて閉鎖されることになるわけです。そのなかで岡崎先生は、北京在住の職員のうち、大使館員にならない者については「そのまま覚書貿易連絡事務所での中国の勉強をさせるつもりである」と中国課長に述べたのです。

また、在京の職員の再就職については、「今日を期して準備してきた結果、大体目途がついており、外務省側に迷惑をかけるつもりはない。万一、外務省の御協力を必要とする場合にはよろしく願います」と語っています。

在京の職員については再就職を斡旋する半面、日中関係の将来を見据えて、北京在住の者には引き続き中国を勉強してもらいたい、というわけです。何ともスケールの大きさを感ずります。<sup>13</sup>

#### 日中航空協定

一九七三年一月には林祐一公使が臨時代理大使として北京に赴任しました。三月には、小川平四郎さんが初代の特命全權大使となりました。

国交樹立後の日中関係では、実務四協定の取り決めが懸案になりました。実務四協定とは、海運協定、貿易協定、航空協定、漁業協定です。最大の難関は、台湾が関係する航空協定でした。日中航空協定には、青嵐会など自民党の台湾派が強く抵抗していました。

こうした状況について、岡崎先生には憂慮するところがありました。岡崎先生は一九七三年七月二三日、國廣道彦中国課長にこう述べています。

一、日中問題について外務省の踏み込み方が足りない。中国側は日本と精神的な交わりを希望しているのであるから日本側もこれに対応しなければならぬ。中国側が愛をつかして日本を相手にしなくなつてからアワテても手遅れである。特に、毛・周健在のうちには地固めをして欲しい。台湾問題については国共合作が進められており、米国もこれを支持していると思われる。米国の後お

して国共合作ができた後で日本が手をうとうとしても再び後手になる。中国が共産主義国だからと言うことで接近をためらっているのなら、もっと中国の共産主義を研究すべきである。

二、通商協定の中にココムを守るための規定があると言うが、ココムの方を絶対不動のものとして協定に条件をつけるのは中国を敵視する差別である。

三、航空協定の問題は国内問題にほかならず、国内政治のために自民党が対中国関係を悪化するのであれば、中国関係を收拾するのは野党だけということになる。そうならば、自民党はますます反中国政策をとるようになる。政府首脳の英断を渴望するものである。

四、一九六四年の椎名外相時代に中国が航空機の相互乗り入れをしたいと言つて来たとき、外務省はこれを認めると中国承認につながると言つて反対した。現在台湾の航空機の乗り入れを認めたままでいるのは「中華民国」を承認していることにつながると言われたらどうするのか。幸い中国側は台湾の航空機をすべて追出せと言つていのではないから、日本側でも、早急に中国の立場を尊重する措置をとるべきである。具体的に言えば、東京から中華航空に出て行つてもらうことである。

五、タカ派の政治家もみんなが、台湾が将来ずっと今の状態であると思つていては誤りである。終戦直後の中国の恩義も蒋介石だけがほどこしてくれたものではない。中共側の恩義も随分受けた。現在国内に反対意見があつても国を誤らない決断をして欲しい。

六、廖承志に会つたとき、丁度新聞に大平大臣訪中の記事が出ていたこともあり、大臣の訪中を歓迎すると言つていたのでお伝え願

いたい。

つまり岡崎先生は、日中航空協定の決着などを強く促したので、事実のところ、「台湾問題については国共合作が進められており、米国もこれを支持していると思われる。米国の後おして国共合作ができただで日本が手をうとうとしても再び後手になる」といったくだりにはやや疑問を禁じ得ないのですが、岡崎先生が日中関係を懸念していたことはたしかです。

國廣課長は、「今の自民党内の状況から言って何らかの形で『中華航空』が東京に来るという可能性を否定することは誰が総理であろうとも自民党内閣にはできないと思う。中国側も台湾との間に航空機が往来すること自身は問題にしないと言っているのであるから何か工夫の余地があるうと思つて苦慮しているところである」と答えています。<sup>14</sup>

航空協定は一九七四年四月によく調印されます。岡崎先生と意見を交わした國廣課長は、のちに駐中大使となっています。<sup>15</sup>

#### 周恩来没後

周総理の健康は悪化していきました。一九七五年一月に訪中した岡崎先生は、対外貿易部に劉希文さんを訪ね、「私は中国人に劣らず周総理の病氣回復を祈っている、多くの日本人も同じように心配している」と述べています。

周総理が他界したのは、一九七六年一月八日のことでした。岡崎先生は、こう記しています。

私はしだいに周総理の清高なお人柄に引きつけられ、総理として尊敬するよりも、人間味の豊かな人として心から敬慕するようになった。そして私は、周総理を人生の師として少しでもあやかりたいものと努めて来ていたのである。

その周恩来総理が長逝せられたのである。私は親を失ったときと同じように、堪え難い悲しみに胸を締めつけられる。「中略」周総理は、自分が死んだら火葬にして、その灰を全国土に撒くと、遺言しておられ、またその通り実行されたので、周総理のお墓はない。また記念碑もない。だから私は北京に行っても何か物足りなくて淋しい。いつか必ず何らか、周総理を偲ぶものができるに違いない、と私は待っている。<sup>16</sup>

岡崎先生は二月一〇日、日比谷公会堂における国民追悼会で、「周総理に対する、われわれの尊敬と感謝は、今後永久に変らぬことを申し上げて、哀悼の辞といたします」と弔辞を読まれています。<sup>17</sup>

一九八〇年代になりますと、日中関係は中曽根康弘首相、胡耀邦総書記の時代を迎えます。とりわけ一九八四年は、日中交流二〇〇〇年の歴史で最良といわれました。そのハイライトは、中国が日本から三〇〇〇人の若者を建国三五周年の国慶節に招待したことです。

全日空相談役となっていた岡崎先生は、これに最長老として参加されました。岡崎先生は、「一高の頃から日中友好の肝をきめていた小生には、今度の日本青年三千人の友好交歓訪中に随行するのは正に冥土への土産と思つて頑張っている」と御友人にしたためています。<sup>18</sup>

「井戸を掘った人」

岡崎先生が帰らぬ人となったのは、一九八九年九月二二日のことでした。

それから二三年後の今日、日中関係は不安定な状態であると申し上げねばなりません。このような時代にこそ、日中関係を切り開いた人、周総理のいう「井戸を掘った人」を思い起こすことには意味がありそうです。

岡崎先生は、まさに「井戸を掘った人」でした。中国で「井戸を掘った人」の筆頭が誰かといえは、周総理をおいてほかにないでしょう。岡崎先生と周総理の国境を越えた友情がなければ、日中国交正常化は難航していたかもしれません。二人が運命的な出会いを果たしたのは、一九六二年秋のことでした。それからちょうど半世紀後の今日、岡崎先生と周総理についてお話しできたことを大変、光栄に思います。

ご静聴に感謝いたします。ありがとうございました。

付記 本稿は二〇一二年一月三日、きびプラザ内の吉備高原リゾートホテル多目的ホールにて行った講演「岡崎嘉平太と中国」の記録であり、講演記録「岡崎嘉平太と中国」（岡山県郷土文化財団岡崎嘉平太記念館『日中国交正常化四〇周年記念 岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える 第一二回講演会』岡山県郷土文化財団岡崎嘉平太記念館、二〇一三年一月）に加筆修正したものである。岡山県郷土文化財団岡崎嘉平太記念館の関係各位に深く御礼を申し上げます。文献の引用に際しては、洋数字を漢数字に置き換えるなどしたところがある。

なお、本稿は、二〇一七年度中央大学特定課題研究費による成果の一部である。

注

- (1) 拙稿「二〇一一年二月二日公開ファイル『日中国交正常化』ほか」『外交史料館報』第二六号、二〇一二年）七九―一〇九頁。
- (2) 岡崎嘉平太「私の記録」（東方書店、一九七九年）一一―一五、一〇一―一八頁、足立正・市村清・本田宗一郎・岡崎嘉平太・宮崎暉「私の履歴書 昭和の経営者群像六」（日本経済新聞社、一九九二年）一六五―一六七、一九三―一九六、二〇二―二〇七頁、岡崎嘉平太伝刊行会編『岡崎嘉平太伝―信はたて糸愛はよこ糸』（ぎょうせい、一九九二年）三〇八―三〇九頁。
- (3) バンドン会議については、宮城大蔵『バンドン会議と日本のアジア復帰』（草思社、二〇〇一年）。
- (4) 原本が公開されているバンドン会議関連の外務省記録として、「アジア・アフリカ会議関係一件 日本への態度 参考資料関係」第一、三巻（B61024-1-1、外務省外交史料館所蔵）、「アジア・アフリカ会議関係一件 日本への態度 高碓代表来電綴」（B61024-1-2、外務省外交史料館所蔵）など。
- (4) 岡崎嘉平太「中国問題への道」（春秋社、一九七一年）二四六頁。
- (5) 岡崎「私の記録」二三―二六頁、伊藤武雄・岡崎嘉平太・松本重治述／阪谷芳直・戴国輝編『われらの生涯のなかの中国―六十年の回顧』（みすず書房、一九八三年）二五二―二五三頁、岡崎嘉平太「終りなき日中の旅」（原書房、一九八四年）一八九―一九三頁、足立ほか「私の履歴書 昭和の経営者群像 6」二〇八頁。
- (6) 「岡崎嘉平太関係文書」スクラップ二六（岡崎嘉平太記念館所蔵）に日中貿易覚書の取り決め事項などが収められている。
- (7) 外務省アジア局中国課「高碓達之助議員の訪中に関する件」一九六二年二月二〇日、「本邦対中共貿易関係 民間貿易協定関係 高碓・廖覚



- 書交換（一九六二年）」E2.5.2.2-1-2, Reel E-0212. 外務省外交史料館所蔵。
- (8) 岡崎嘉平太伝刊行会編『岡崎嘉平太伝』三六五頁。
- (9) 藤山愛一郎『政治わが道 藤山愛一郎回想録』（朝日新聞社、一九七六年）二一六頁。中国側動向については、「廖承志関于接待高碕達之助及其随行人員的請示、来訪人物材料和言論」105-0115-01. 中華人民共和國外交部檔案館所蔵。
- (10) 霞山会『日中関係基本資料集 一九四九年―一九九七年』（霞山会、一九九八年）二二五―二二六頁。
- (11) 外務省アジア局中国課「自民党若手議員・公明党・覚書貿易等の訪中」一九七一年六月九日（「日中国交正常化（重要資料）」二〇一―一〇七一九、外務省外交史料館所蔵）。
- (12) 岡崎『終りなき日中の旅』一九六―一九七頁。
- (13) 中国課「岡崎日中総合貿易連絡協議会会長談」一九七二年一〇月九日（「日中国交正常化（重要資料）」二〇一―一〇七二〇、外務省外交史料館所蔵）。
- (14) 國廣道彦中国課長「岡崎嘉平太氏の意見」一九七三年七月二三日（「日中国交正常化（重要資料）」二〇一―一〇七二〇、外務省外交史料館所蔵）。
- (15) 國廣道彦／服部龍二・白鳥潤一郎解題『回想「経済大国」時代の日本外交―アメリカ・中国・インドネシア』（吉田書店、二〇一六年）。
- (16) 岡崎『終りなき日中の旅』一八九―一九〇、一九九頁。
- (17) 岡崎『私の記録』一五二―一五三頁。
- (18) 杉山久男宛て岡崎嘉平太葉書、一九八四年九月一八日（岡崎嘉平太関係文書）岡崎嘉平太記念館所蔵。
- (総合政策部教授・日本政治外交史)